

只義仲が義経に討たれる時にその四天王の一人と云はれて居る樋口が、多田藏人征伐の爲め留守であるといふ事だけ書いてあり、樋口の方は樋口の方で、主君の滅亡を知つて時機を待たうと船頭権四郎といふ者の入婿になるといふ事だけしか書いてありませんので、敢て不自然といふ程の批難も加へられぬか知らぬが、何やら不満足に思はれ升。第二に此幕で見るとお由とお筆は双方全く面識がない様であるが、院本に據ると此一つ前の場即ち大津の清水屋で、確に二人は逢つた事がある筈である。それはお由が大津繪を持つて隣の部屋へ行き、それを駒若君にやる處である。然もお由が襖を明けて「これ申しお隣の」云々と云ふとお筆がその大津繪を取つて押戴き、「これは／＼忝けない」云々といふ會話までして居るのですから、全く知らぬ等はありませぬ。是等は作者の不注意から起つた事でありませうが、氣になり升から一寸申して置き升。併しこの場だけで云へば、お由も権四郎も全くお筆の顔を知らない事にして置いた方

が面白いと思ひ升。扱是等の缺點を除いて私は此一幕を非常に面白いと思ふ、権四郎といふ普通の船頭を主人公とし、樋口の松右衛門、お由、お筆を脇にした一幕物として見て愈々面白い。何故かと云へば此一幕の間に権四郎といふ役は、殆んど總ての表情の種類を盡して居る様に思ふからであり升。先づざつと権四郎の表情の移變りを申して見升と、第一は平靜の内に行方の知れなくなつた孫を思ひ出して稍悲しみの表情があり、第二に松右衛門の出世を聞いて稍喜び、第三にお筆の姿を見て一圖に槌松の歸つて來た事と思ひ、「夢か現かい」何故入らぬ」のあたりは、大歡喜の表情に移り、第四に槌松の死を聞いて自失の情態となり、第五に漸く涙を覺えて悲しみの表情となり、第六に大悲嘆となり第七にお由を叱る尾についてお筆が諦めると云ふと、「女子黙れ」といふ邊から漸々怒りの表情となり、第八には「首にして渡さう」といふ大忿怒の表情に移り、第九に樋口の名乗を聞いて意外の表情、第十に「我子の主人は己が爲にも

御主人」といふので、断念の表情になり、暫く平静の表情あつて、第十一に笈摺の件から「榎松聖靈頓生菩提」まで、最う怨もなく怒もない純粹な悲しみの表情に終る。此間には悲しみの種類もいろ／＼あり、怒りの程度もいろ／＼あり、喜びの對象もいろ／＼あつて玩味すれば玩味する程深い味があると思ひ升。此表情の轉移は、片市の藝に據つて知る事が出来たので、片市はこの淨瑠璃に於ける権四郎の情の轉移を解釋して遺憾ないものと思ひ升。聊か藝評に涉る様であるが、片市が是等多くの表情の轉移を突然にやらず、漸々にやつた處、それからこの多くの表情を通じて亡き孫を悲しむ祖父の涙を一貫した處は寫實藝として絶妙の感があり升。表情の移變りが唐突でない事は、榎松の死を聞いて呆然自失の顔色から、漸く少し口を開き、漸く目を睨たいて悲みの表情に移る處、その悲みの表情の内にお筆の物語を聞いて、漸く怒りの表情に移る處邊が好適例です。榎松に對する悲みが一貫して居るといふ事は、人形の方から云

へば餘り寝めた事でなく、怒りは怒、悲みは悲、喜びは喜とちやんと區切が立つた方が好いのかも知れませんが、幾ら淨瑠璃でも一旦人間が演ずる以上は、人間らしい自然な従つて寫實な表情をしなければなるまい。また権四郎と云ふ人の性格から云つても、所謂「取外す」側の人であつて、俄かに喜び、俄かに怒り、俄かに悲む底の人であるかも知れぬが、私は権四郎を常識のある感情の度合も普通な人間として見たい。さう見た方が我々明治の青年には痛切の感がある。この點から見て私は片市の権四郎から學ぶ處が多かつた。松の場は脚本の上から見て別にいふ處もない。但し大甘な立廻は感興を殺ぐ事甚しい。此場に於ける権四郎の表情は又前の場にならぬ表情がある。それは眞に駒若君を愛する情と、これを己の孫にして助ける積りて樋口が何かいつても取合ず、何もかも承知をして居る、安心だ、といふ表情がある。最後の舟唄は今迄の總ての情を絞つて結んだ感がある。

『富士太鼓』 (同 前)

『富士太鼓』といふ能は謡曲で讀んだだけだが、住吉の樂人の富士といふのが花園天皇の御召て京都へ行き、同じ樂人の淺間といふ者に妬まれて殺される。それとも知らずに富士の妻が子を連れて夫の安否を尋ねに行き、事の様子を知つて物狂ほしくなり、太鼓が敵だと云つて撥で太鼓を打つといふだけの筋で淡りした詩的な佳作です。人物は富士の妻とその子と、物語をする官人と別に從者が一人、これだけで淺間を陰にしたのも餘情があつて好い。殊に富士の妻が官人に夫はどうしたと聞くと、直ぐ直截に「このう富士は討たれて候ふよ」といひ、富士の妻が「何と富士は討たれたると候ふや」といふと、官人又直截に「中々の事富士は淺間に討たれて候ふ」といふ邊など、少しも廻り諄い處がなくて好い。それから富士の妻が「あら恨しや如何に姫、あれに夫の敵の候ふぞ

や、いざ討たう、あれは太鼓にて候へ、あかて別れし我夫の失せにし事も太鼓ゆゑ、只恨めしきは太鼓なり、夫の敵をいざ討たう」といつて狂ひになつて太鼓を打つ、思ふさま太鼓を打つて仕舞ふと、「我には晴る、胸の烟、富士が恨みを晴せば、涙こそうへなかりけれ」といふので胸の晴れる邊も心持が好い。さて今度の「富士太鼓」は此謡曲を元にして作つた脚本であるが、全く能を離れた處が作者の得意とせられる處であるさうだ。併し全く能を離れた物であるかどうか、先づ疑しい。富士の妻の狂ひの邊は能から出た所作事ではあるまいか。それはさうとして能から離れたといふのが自慢な脚本であるから、純粹な脚本としてその價値を考へて見たい。今度の脚本の筋は、先づ知足院の庭で舞樂の催がある、一順舞樂が終ると、知足院は舞人二名に被物をとする。次に樂人の淺間を呼出してこれに祿を賜ふ、淺間が面目を施して退出しようとする、洞院長實卿といふ人が微醺を帯びて出て來て淺間を留め、今日御身の打つた太

敵の手は亡せにし富士が秘傳である、それをどうして知つたかといふので、遠廻しに淺間が富士を討つて秘傳の一卷を奪つたに違ひないといふ事を諷示す。諸卿は長實を御遊の興を殺ぐものなりと云つて退ける。淺間は事なう退出する諸卿も一先庭を退く。そこへ富士の妻がその子の忘草を連れて夫の安否を尋ねに来て、常々夫が別戀にした長實卿に逢ひたいといふ。長實卿が出て来て富士は人手に掛つて果てたと物語ると、忽ち富士の妻が氣が狂ふ。そこへ知足院が出て来て「信濃なる淺間」云々といふ歌を色紙に書いたのを富士の妻に渡す。富士の妻は此歌を讀むと俄に狂氣が直つて富士を討つたのは淺間だなどといふ思入があり、敵を討たうといふので知足院を辭す。舞臺半分廻つて紅葉林を縫うて泣く／＼歸る富士の妻子を、知足院は廊より、長實は幕の陰より見送るといふのに終つて居る。これだけの筋を讀んだだけでも、如何に此脚本の作者が、此材料を平凡に不自然に締りなく書いたか分る。此劇を見た人は一層その感

が深いであらうと思ふ。第一この幕へ淺間を出す理由が薄弱だ。理由が薄弱だから従つて人物も躍動して居らん。第二に富士を殺して秘傳の一卷を盗んだとしたのも悪い。淺間は富士に勝るとも劣る程の樂人ではない。それは謡曲にも「信濃なる淺間の嶽も燃ゆるといへば、富士の烟りの甲斐やなからん」とあるのでも分る。伯仲の間にある二樂人が争つてこそ面白いので、富士の秘傳を盗んで名を爲す様な淺間にしたのは面白くない。此點は只妖んで討つたといふ能の筋の方が感しが好い。第三に富士の妻の氣が狂ふのは許すべしとして、歌を讀んで氣狂の直るのは可笑い。これも太鼓を散々打つて胸を晴す能の筋の方がまだ自然だ。第四に大勢の諸卿を出したのは、芝居の背景として賑かて好いかも知れぬが、その背景が富士の妻に對して何等の効果を呼起さないのも缺點だ。富士の妻子が去るのを長實と知足院が見送る舞臺面だけは賛成だ。要するに能から出て、更に能以外の新天地なく、能の形式を離れた脚本であり乍ら、劇的

發展の不充分なる點より見て、この脚本は全然失敗の作であらうと思ひ升。

『梶原譽石切』

(同 前)

一體梶原が二ツ胸の試斬の時、六郎太夫を助けて罪人だけを斬る腹が分らぬ。刀が欲しい人なら大庭が梶原の目利きだけで満足しなかつた時に、自分が買つて了へば好いてはないか。目利を疑はれたのを残念に思ふなら、一ツ胸だけ斬る様な愚な事は止めていさなり石を切つたら好いてはないか。一人斬る位なら斬らないのも同じではないか。要するに斬られた罪人こそ好い迷惑だ。昔の作者が徒に波瀾を設けようとして却て不自然に陥つた之は好適例である。縦令罪人を斬つた迄は好いとしても、大庭などが退場してから、梶原が刀を買はうといふと、六郎太夫がそれでは氣が濟まぬといふのは、梶原の目利を疑ふ様にもなり、名刀に對する自信もない様だ。従つてこれに梶原が石を切るのも詰らな

い。強ひて此一幕の美處を擧ぐれば、六郎太夫が婿文藏の爲に三百兩の金を得んとして二ツ胸の一つにならうと云ひ出す處だ。娘が躓いて來る必要はない様に思つたが、婿の爲に金を調へるのであるから心配して躓いて來たと思へば好い。無論作者は舞臺の配合上出したものに相違ない。罪人の愚痴に院本にもない「ビールの泡」とか「南無阿彌ラム酒」とか明治式の當込を云はしたのは不都合だ。

御洗石の辨償は誰がするのだらう。梶原がするとすれば、馬鹿に不廉い刀を買つた譯になる、六郎太夫が拂ふとすれば、折角の三百兩もフイになつて了ふだらう。此様な事に一向頓着なく、得意氣に微笑むて歸る梶原、喜び喜んで之を見送る六郎太夫、「氣が知れぬ」とは斯かる人達を云ふのだらう。

『三幅對上野風景』

(同、前)

直參の御數寄屋坊主たる河内山が、己の位置を利用して出雲守を抑へ付けて上州屋の娘を助けるのは痛快だ。仕了せて歸らうとする玄關先で大膽に見現はされるのも妙。見現はされても繩を打たれぬのは更に妙。花道へ来てから己むを得ず黙つて居る大膽を嘲弄一番して入るのは更に妙、蕎麥屋の件は技巧上の抜目のないのに感服する。初め蕎麥を食つてる二人が探偵なのも好い。これが歸ると直次郎が出て来て門から蕎麥屋の内を覗き、誰も居ないで丁度好いと云つて入り、始終顔を見せない様にして蕎麥を食つて居る。そこへ丈賀が出て来て、蕎麥屋が起きて居れば好いがと繰返し心配しながら杖で戸口を探つて見て、起きて居るのを喜んで中へ入る。蕎麥屋は常得意とて大に之を欸待する。丈賀は幾ら察して御馳走になつても、この蕎麥を食はなければ氣が済ま

ぬといつて、旨さうに蕎麥を食ひ乍ら、三千歳の噂になり直侍の事に及ぶ。直次郎はソコソコに拂ひをして外へ出る。舞臺半ば廻つて蕎麥屋の戸口を正面に、裏口の開つ放しになつてる隣家の黒塚を見せる。直次郎が待つて居ると丈賀が出て来る。こゝで初めて直次郎が聲を掛けて三千歳へ文を頼む。丈賀が引込むと直次郎は直ぐ花道へ向ふと、下手から丑松が出て来て、これと擦違ひ名乗合つて別れる。丑松が一人残ると蕎麥屋の亭主が行燈を納ひに外へ出て、隣の裏木戸の開いて居るのに氣付き、女房に「知らせてやれ」と云ふ。丑松がこれを聞いて直次郎を訴入する決心を堅めて引込むといふ運びだが、舊い形式を利用して五分の隙もない處は感嘆の外ありません。

『義經千本櫻』

(明治廿八年十二月。市村座。)

千本櫻といふものが若し不朽のものであるならば、鮎屋によつて不朽になる

ものではあるまいか。鮪屋の外は餘り賞讃すべき價値はないと思ふ。殊に千本櫻全體を通じて讀んで見ると、渡海屋が知盛であり、彌助が維盛であり、覺範が教經であるといふ様な事が澤山あつて面白くない。今度の芝居は狐忠信に關する場だけ出した様であるが、それにしては何の爲に大物浦を出したのか譯が分らん。今度の大物浦は能の船辨慶を芝居にして見せたゞけの事で、渡海屋といふものがないから、千本櫻といふ院本に對しても、不性な出し方であると思ふ。さて狐の一件であるが、この狐は鳥居前と道行と河連館と三ヶ處に出るだけの様であるが、鳥居前は只出て靜を救ふといふだけの事で、自分が狐であるといふ自白はして居らぬ。道行に於ても格別論ずべき自もない。要するに千本櫻の狐は河連館に於て、その全體を現して同時に姿を隠して了ふものである。よつて河連館一場を以て狐忠信なるものゝ價を定むる事が出来ると思ふ。この狐は自分の兩親の皮で出来た初音の鼓といふものを慕つて、國へ歸つて居ない

等の忠信と姿を窺し、長く靜の供をして終に河連館へ来る。そこで見現しになつて初めて自分の履歴を告白する。義經が動物の孝に感じて鼓を譲る、狐はその返禮として義經の難を救ふといふだけの事だ。狐といふものを人間にして、芝居の色合として揃ませる事の好悪は措いて、その動物が劇中人物或は劇の全體に或る影響を及ぼして居れば、一種人間以外の力といふ物を感じて非常に面白いと思ふが、この千本櫻の狐の如きは、義經靜等に何等の影響を及ぼして居ない様に思ふ。狐は狐で全く離れたもので、その離れたものが時々飛出して離れた儘に、色合を付けて居るといふのに止るのであるから面白くないと思ふ。義經が狐の物語を聞いて感涙を催すが、それも一時の事でそれから後どうかうといふ事がないのである。一體かういふ動物に關する院本を書いた作者の考へは兎に角、昔の役者がこれを舞臺に上すに當つては、これに由つてケレンを見せようといふだけの考へてやつたらしい。それであるから古名優の型に據つて

舞臺の上に演ぜらるゝ芝居その物を見たりは面白いが、その場の院本的價値といふ物は太したるものではない。

『大杯觴酒戰強者』 (同 前)

この芝居の妙味は、形は大名であつて、心は平民的な井伊掃部と、心は立派な武士であつて、形は足輕である馬場三郎兵衛とを突合した處にあるのであらうと思ふ。即ち井伊掃部の氣合は馬場三郎兵衛の姿となつて現れ、馬場三郎兵衛の心持は井伊掃部の形となつて現れて居る。つまり形と心を兩方に入替へた様な人物が二人出くはして、意氣相投合する處が面白いのであらう。だから足輕の姿をして居ても立派な武士であるといふ事を失はぬだけの柄のある役者と、平民的な態度を取つても少しも大名たるの尊嚴を破らない様な柄のある役者とが演じてこそ、多大の興味を感じるものであつて、全然柄の芝居であると思ふ。

ふ。僕は權十郎と左團次で一度、高麗藏と猿之助で一度、それから今度の菊五郎と吉右衛門とかう三度見たが、三つの内で面白いと思つたのは第一の場合のみであつた。第二第三の場合には全然この劇の脚本としての價値を認める事が出来なかつた。

『伽羅先代萩』 (明治廿九年一月。歌舞伎座。)

先代萩では何と云つても飯焚の一幕が傑出して居る。政岡の子に對する親の愛と、君に對する臣の愛とが、纏綿の妙を極めて居る。初め、鶴喜代と千松を御飯を食べさせずに待たして置く處は、臣の愛は無論表れて居るが、千松にも毒のある物は食べさせたくないといふ親の愛も仄見えて居て面白い。千松に毒味をさせる處は、臣の愛の爲めには親の愛を犠牲に供しても好いと云ふ腹を見せる處で、臣の愛が親の愛に勝つて居る場合だ、然し千松は毒味で斃れないか

ら、また左程其臣の愛が明確に表れぬ。千松が毒の菓子を食べ、菓子箱を蹴返して斃れる所では、政岡が臣の愛の最も明瞭に最も高潮に表れる處で、此場合には親の愛は全然犠牲に供されて居る。一同が退場すると、鶴喜代が難關を逃れたので、ホツと一安心する、即ち君に對する臣の愛から出た心配が一時休む、そこで今迄堪へて居た親の愛が一時に迸り出て、千松の爲めに血涙を絞つて泣く、ここは親の愛が最も高潮に表はれる處だ。茲て幕を閉づるのも好い。親雀と兒雀を養ふ件、雀の歌の一條は、舊劇に數の少ない詩的なシインの一つだ。床下は繪を見るやうで、何時見ても美しい、全體の筋と全然離れて居らぬのも可い。對決は明治の裁判を心得て居る者の眼から見ると随分馬鹿々々しい物だが、何となく勝元の豪く見えるのは不思議だ。刃傷は外記の落入が好い。然し死にかゝつて居る人に謠を歌はせるなどは随分殘酷だ、昔の名君は左様した者だつたのか知ら。

『酒道樂』(同前)

是は英米に所謂 Temperance Play 即ち禁酒劇とも云ふべきもので、現に亞米利加などにも『どろんけん』とか『滅びの盃』とか云ふ外題の物が十數種ある。何れもメロドラマ式なもので、人物の性格も糞もない、唯筋丈のものだ。斯う云ふ種類の脚本を文學上から評して愚劣だとか拙悪だとか云ふのは野暮の骨頂である。此種類の脚本の目的は人に禁酒を勧めるのにあるので、其目的さへ達しられれば、其脚本は傑作だと云はなければならぬ。此意味に於て「酒道樂」が傑作であるか如何かは此芝居の千秋樂の後で、此劇に依て禁酒をした看客の統計を作つて見なければ分らぬ。茲に一つ僕が此劇を見て嬉しいと思つた事がある、それは脚本を以てする「悔悟」の描寫の形式が稍僕の持論と一致して居た事だ。僕が近頃の新劇を見て常に嫌らず思つて居るのは「悔悟」

の唐突にある。「想夫憐」の小泉の悔悟、「伯爵夫人」に於ける伯爵の悔悟、比々として皆然りである。僕は常に斯う思つて居る。人間と云ふ者は中々眞の悔悟に到達するものではない。一度悔悟するかと思ふと、直ぐ又罪を犯す、又悔悟する、又罪を犯す、斯う云ふ風にして段々進む内に、終に眞の悔悟に到達するものだ。悔悟をする動機が薄弱だと其悔悟の度も薄弱になる。其薄弱な悔悟を幾度も重ねて来た揚句、眞の悔悟を喚起するに足る丈の力の強い動機に遭遇して初めて人間が新しくなるのだと思ふ。だから悔悟と云ふ事は小説に書くのは或は容易しいかも知れないが、時間の短いのを尊ぶ脚本を以て之を描寫するのは中々容易な事では無い。若し脚本で悔悟を書くならば、序幕から悔悟の緒を見せて、二幕目、三幕目と、段々と悔悟の動機の強いものを持つて来て、最後に眞の悔悟を喚起する底の動機を作り、大詰で初めて眞の悔悟に到達するやうに書かなければならないと思ふ。弦齋氏の「酒道樂」に於ける酒山、百川の禁酒

(一種の悔悟)の形式は計らずも僕の持論と一致して居つた。然し夫は唯形式の上のみの話だ。「酒道樂」が悔悟を描寫した理想的の脚本で無い事は多言を要すまいと思ふ。僕は自ら文學上より論ずべきものでないと稱した脚本を思はず文學上から論じて了つた。然し此は脚本「酒道樂」餘論として讀んで貰ひたい。大詰で皆がドカドカ禁酒するのは全く僕の形式に反して居る、不賛成。

『十二時會稽會我』 (明治廿九年一月、東京座。)

淨瑠璃會我會稽山は確に近松の佳作の一つであつて、僕も常々愛讀する處であるが、その會我會稽山に基いて櫻痴居士が作つた脚本十二時會稽會我は何故か一向味のないものだ。その理由を考へて見ると近松は詩人であつた、櫻痴居士は詩人でなかつたといふ一言の答で盡きて居る。櫻痴居士が詩を解さなかつた人である事は、場面の拔差からも文句の直し方からも論ずる事が出来る。

先づ場面の比較をして見ると、近松の原作では第一段の第一場は竹取の間で、高家の妻女が集つて鹿評定をして居る處である。第二場は大名小路で範頼が鬼王に割符を渡す處だ。第三場は北の丸の大廣間で蒲殿が切腹し、二宮が狩場へ急使に立つ處だ。第二段の第一場は二宮の留守宅で二宮の妻が夫を追うて駆出す處だ。第二場は藤澤寺の下の心太屋で二宮夫婦の邂逅並に鐘の條がある。第三段の第一場は狩場て團三の召捕並に曾我兄弟が祐經から荒馬を貰ふ條がある。第二場は曾我の里で假病をして居る母を尋ねて曾我兄弟が来る。即夜別れて出立する。第四段の第一場は虎少將の道行で裾野近く假屋から駕籠で歸つて来る龜菊に逢ふ條。第二場は假屋で兄弟の復讐。第五段は頼朝の御前に於ける五郎の問答といふ順になつて居る。櫻痴居士の十二時は第一段の第二場を抜いて第二場では朝比奈三郎の條を抜いて居る。第三場の終りて二宮夫婦の別を濟し、原作第二段の全體を抜いて了つた。第三段は略原作の通りだ。第四段に至

つて虎少將の道行を抜いて居る。第五段は全然之を抜いて了つた。二宮夫婦の事件は見物に片唾を呑ませる面白味があると同時に、心太屋に於ける梶原主従の滑稽、藤澤寺の鐘の音などといふものがあつて餘程面白いのに櫻痴居士はすつかり之を抜いて了つた。北の丸で二宮の離縁を濟まして了ふのは無理でもあるし飽氣なくもある。原作では急使に立つた二宮の跡を追うて妻が駆出した事になつて居るから、曾我の閑居の場て「二宮へ人を走らせても夜明より夫婦ながら留守」といふ文句が解るが、心太屋を抜いた十二時の曾我中村閑居で「夫婦とも不在」とあるのは解らぬ。第四段の虎少將道行といふ極めて詩的な場を全然無視して了つたのも残念だ。詞の上から行つても兄弟が祐經から貰つた荒馬で家へ歸る處のチヨボで、原作に「仇は却つて情の馬」とある其「仇」の上へ「つけねらふ」と付けたのも滑稽なれば、満江が二人の子を怨む處で「起臥立居明暮に病となつて痛めんより、鳩毒となつて一思ひに殺して了へ兄弟」と

いふ原作の妙文句を、無残や「起臥立居明暮に病となつて痛めんより、一思ひに殺して了へこりや兄弟、ても怨めしい心ぢやなア」といふ平凡な文句にして了つた。かういふ例はまだ澤山あらう。全體からいふと原作の白ばかりを用つて、地の文を一向頭に置かず、筋ばかりを運んで行つた傾があるので、それでこんな味のないものになつたのではあるまいか。近松を脚本に直して原作に近い興味を引起さしめんと欲せば、充分地の文をも咀嚼して之を頭に入れた上で筆を下さなければなるまい。

會稽山にプロロオグが要ると云ふ人の説には不賛成だ。會稽山だけで充分解ると思ふ。蒲殿の切腹は如何にもあつけない。曾我兄弟に割符を與る爲めに生きて居た人のやうて如何にも不自然だ。今度の芝居を見て可笑しいと思つたのは、兄弟の遺書を二つの紙帳に一句一句割つて書く事だ。文章の前半を一つの紙帳に書き、後半を一つの紙帳に書くなら分つて居るが、一句一句チャンボン

に書くのは分らぬ、嚙骨の折れた事だらう。二宮が仁田四郎と偽稱する件を省いたのは甚だ物足らぬ。

『扇屋熊谷』(同 前)

敦盛が女になつて居る理由が分らぬ。女に化ける事が出来る程美しい人であつたからと云つて、女に化けなければならぬ理由は無い。上總が桂子を敦盛の身代りに立てる件は、全然「寺子屋」の形式だ。「捻ぢ首搔き首にも致されまい」など、云ふ同文句もある。「寺子屋」と同一の形式であつて、「寺子屋」程の興味を惹起さぬ第一の理由は敦盛が女になつて住み込んで居る事の不自然な處にあり、第二の理由は敦盛と云へば普通位のある武士と云ふ感じしか起らないのに、菅秀才と云へば何やら神々しくて神様らしい、尊い人だと云ふ感じがする。其神様らしい人の危急に對する同情と、普通位の高い武士の危急に對する同情と

の度合が餘程違ふからだ。加之菅秀才は力の無い少年である、敦盛は充分抵抗のある立派な武士である。又菅秀才は道真即天神様の一粒種である、敦盛は平家の一公達に過ぎない。此人が殺されたからと云つて左程大きな影響はないのだ。「扇屋」が「寺子屋」を真似て其足元へも及ばないのは全く敦盛に對する吾人の遺傳的尊敬の度が菅秀才に對する吾人の遺傳的尊敬の度に及びもつかぬからだ。「五條河原」は戦争の舞臺浚ひと云ふ珍極まるものだ。要するに此劇は色彩的に美だと云ふ迄の代物で、繪畫的に美だと云ふ事も出来ぬ程淺薄なものだ。

『艷容女舞衣』(同前)

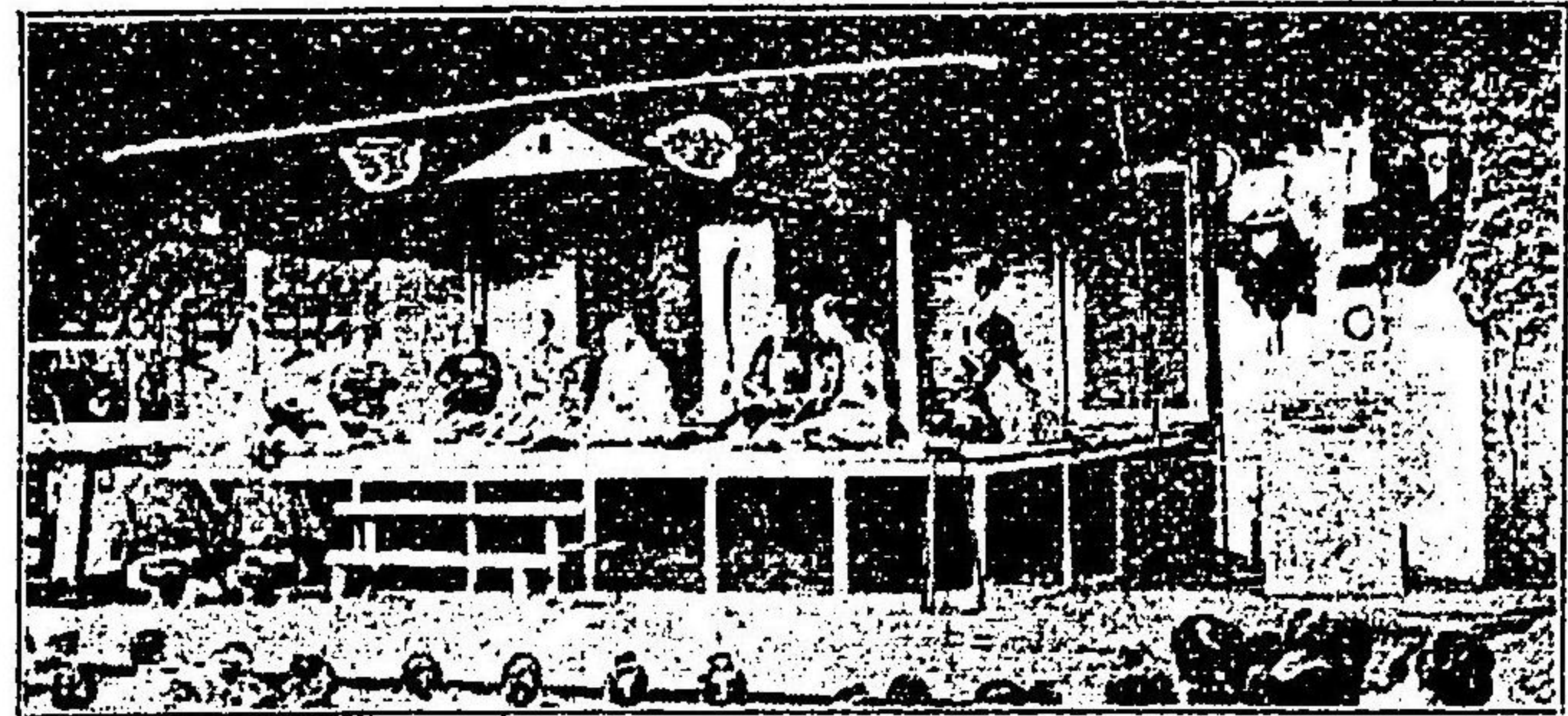
半兵衛と宗岸と云ふ親と親との義理を書いたもので、其處は實によく書いてあると思ふが、お園と云ふ女の夫半七に對する義理、夫の情婦三勝に對する義

理は不明瞭だ。一體お園と云ふ女の性格は解し難い。「去年の秋の病ひに」など云ふ不快な愚痴を洩らすのも嬉しくない。三勝がおつうを捨てる形式は面白い。落語の「お文様」と云ふものにも之と同じ形式が用ひてある。「酒屋」よりも古い淨瑠璃の「伊豆院宣源氏鑑」にもあるさうだ。三つとも酒屋なのも面白い。何れかと始まりて、後の人が面白いと思つて段々真似たに違ない。一體「酒屋」と云ふものは、淨瑠璃で聴くべきもので劇で見るべきものではあるまい。劇としては遺書の廻し讀もだれるし、三勝と半七が外に蹲まつて居て、何も云はず、何もしないのにも困る。然し今度の東京座の出し物の内では一番感度が深かつた、矢張人情が切であるからだらう。

『孤城落月』(明治三十九年三月。東京座。)

用心に用心を重ねてした事が却て失敗に終るといふ事實は確に新時代の悲劇

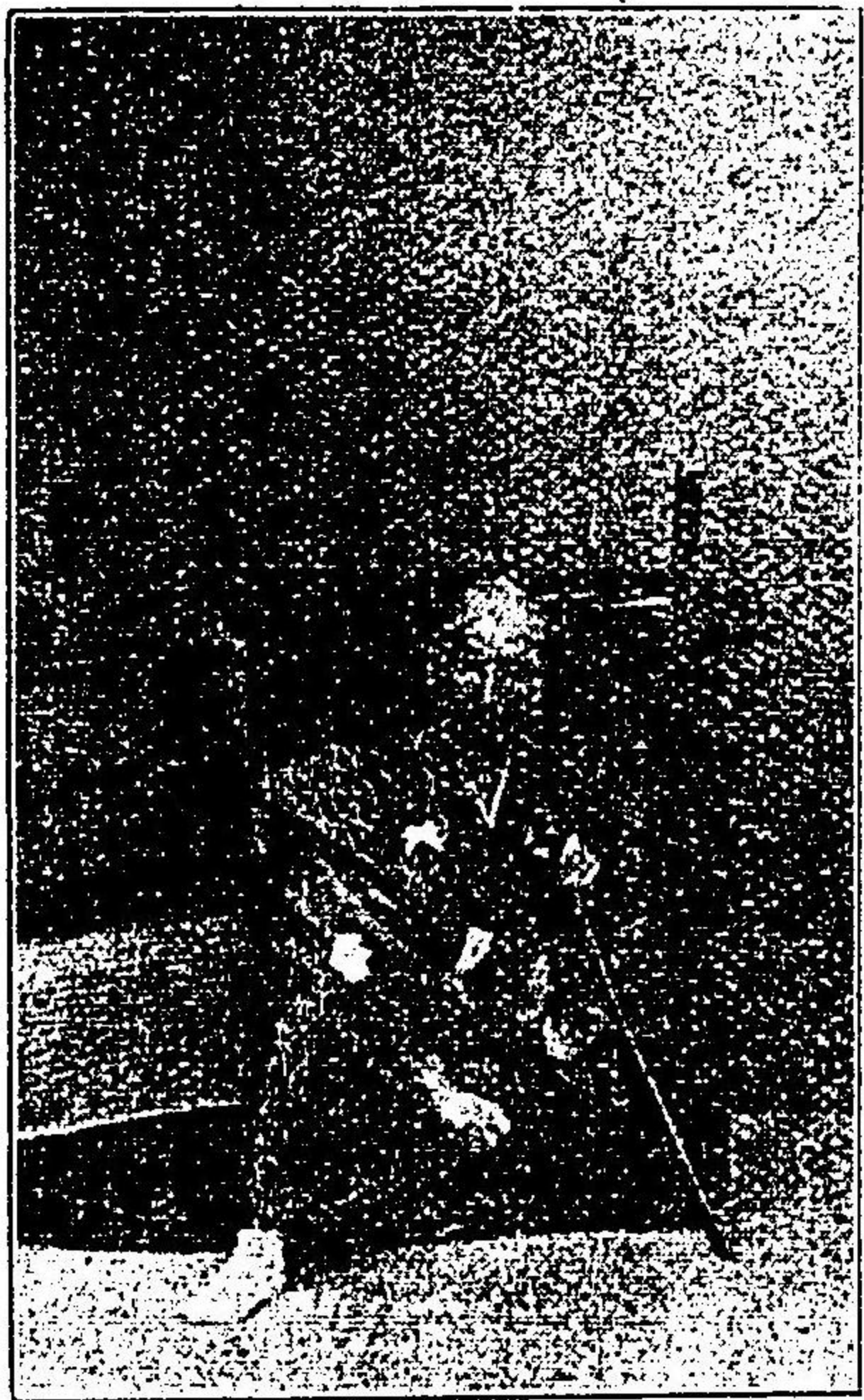
の好題目であると思ふ。坪内先生が片桐且元を主人公として、此好題目を脚本に書かれた事は非常に嬉しいと思ふが、其新しい題目を實現するのに古い脚本の形式を以てせられた事は返す返すも残念に思ふ。尤も一口に古い形式だと云ふのも亂暴な話であつて、實は中々新しい處がある。芝居の座



大坂に於ける「孤城落月」茶白山本陣
(原作用家康を出入せり)

付作者が書けば井伊掃部が駕籠を焼く處だの、大砲を打つ處だのは屹度形に現はしたに違ひない。是等の甘い方面を陰にして濫い方面のみを表に現はした事は確に新しい。随つて白に重きを置かない今日の看客には解り悪い處も多いてあらうと思ふが、それは看客が悪いので作者に罪はな

い。ウンと濫い作を書いて看客の頭を進めて行くのは、寧ろ今日の作者の義務であらうと思ふ。さてそんなら「孤城落月」は總てその濫く出来上つてるかといふにさうではない。序幕の如きは寧ろ甘い方面で、寧ろ陰にして貰ひたい場である。これを要するに此脚本は新しい思想、新しい同情を新しい形式で書かうとしながら、



市川猿之助の片桐且元

た處がある。第二に此脚本の主人公は勿論且元であらうと思ふが、作者は淀君を書くにも主人公を書くと同位に力を盡したと思はれる。随つて或場合

道樂氣よりからか、時代の要求に應ぜんが爲からか、大分古い形式に讓歩をし

には且元が主人公であるか、淀君が主人公であるか分らなくつて、それが爲に終始一貫した力といふものが明瞭と感ぜられない。此脚本が何となく吾人青年に取つて不満足の點のあるのは、この形式の混同及主人公の混同からであるまいかと思ふ。脚本を讀んでも今度場に出た劇を見ても、私の尤も好いと思つたのは、大話の本丸櫻門前の場で、片桐が瀕死の病體を推して駕籠に乗つて出て來ると、跡から十河十兵衛が立派な空輿を陸尺に昇かせて來る。淀君と秀頼を迎へるのには二挺の輿が要るのに、どうしても一挺しか手に入らぬと聞いて、危急の場合且元は自分の駕籠をその一挺に當てよといふので駕籠から下りる。孝利は此駕籠に隨つて門内に這入つて了ふ。十兵衛が且元を介抱して居ると門内に大砲の音がする。「十兵衛様子をく」といふので十兵衛が去る。こゝで且元は全く一人になる。彼は今形に於て孤獨であるのみならず、心に於ても又孤獨なのである。「大御所存命の間は平和を陽に一時を欺き、徐に

計を運らさんと、思ふ心の偽りに、爲すことおのづから稜稜となり、言行に矛盾の影を現し、味方も誤つて我を疑ふ」この心は孝利も解せず、十兵衛も解せず、これを知る者は且元彼自身あるのみである。作者はこゝに於て確に新時代の同情を描き現して居る。「茶臼山本陣」は家康といふ爺さんと、且元といふ老人とが、兩方で旨い事を云つて欺し合つて居る處が面白いので、舞臺上の都合から云つても二代將軍と且元では納らない。大話は計略に陥れたといふものゝ、幾らか且元を哀れに思ふといふ心もあるものであらうから、二代將軍でも悪くはない。繙庫では今度加へたといふ、修理と内膳の詞戦ひの盛んなのを面白と思つた。要するに此脚本は「桐一葉」の後段として見るべきもので、單獨に離して見るべきものであるまい。「桐一葉」は内容が多いが且元の描寫が充分でない。「孤城落月」では且元は明瞭に描けて居るが、内容が貧しいと思ふ。私は「桐一葉」をコンデンスしたものと「孤城落月」とを續けて一つの纏つた脚

本を作つて戴きたいと思ふ。但しこれは坪内先生以外の人がやつては駄目である。

『助 六』 (明治廿九年五月。歌舞伎座。)

田舎から東京へ出て来て、いさなり西洋の學問をした明治の青年の眼から見れば、助六の狂言は一文の價値もない、くだらない狂言であるかも知れない。併しよくよく研究して見れば斯かる脚本にも味ふべき價値は充分ある。助六の狂言には人間といふものが書いてある、時代といふものも現れてある、景色の描寫もある、性格の書分もある、劇としては敵を探す爲に無暗に喧嘩をして相手の武士に刀を抜かせ、其身の長さを測るといふ緊張の分子もある。先づこの脚本は讀物としても徳川時代の洒落本にあさく劣らぬ名文で、その會話の妙にして五分の隙もなき事、警句の豊富にして甚しき下劣に陥る事などは

大に賞揚すべき價値がある。又この脚本は上方の種を取つて書いたものだが、徹頭徹尾江戸式である處が面白い。こゝに嚴格なる批評家あつて『助六』に性格の書分なしとするも、少くとも「江戸ッ兒」といふ抽象的な性格をこの脚本全體が説明して居るといふ事は之を認めるであらう。「江戸ッ兒」の特質の一つとして著しいものは「負惜み」であらう。その「負惜み」といふ事は實に好くこの脚本に現れて居る。助六にもある、意休にもある、揚巻にもある、新兵衛にもある、仙平にもある、かんぺら門兵衛には最も好く現れて居る。それからこの脚本にはあらゆる種類の江戸ッ兒が現れて居る様に思ふ。助六は立役の江戸ッ兒、意休は敵役の江戸ッ兒、揚巻は女形の江戸ッ兒、新兵衛は和事師の江戸ッ兒、門兵衛は二枚目敵の江戸ッ兒、仙平は三枚目の江戸ッ兒。その立役になると、敵役になると、女形になると、和事師になると、二枚目敵になると、三枚目になるとを問はず、悉く江戸ッ兒である處が面白い。自分はこの芝居を見ると、祖

先の社會を眼前に見る様な心持がして、身内の江戸ッ兒血液が躍る様である。由來悪態は江戸ッ兒が祖先傳來の武術である、その武術の虎の巻はこの助六であるといつても、敢て過言ではあるまい。江戸ッ兒の痰火はその罪のない處が身上である。これを聞くと一種滑稽の感に打たれる處が直打である。「胸腹へ細引を通して、五丁町の真中で女郎の百萬遍を繰るぞ」といひ、「蕎麥粕野郎奴、たれ味噌野郎の出しがら野郎奴」といひ、「巳が口へ大戸を立てると、鼻の穴の潜りから自由に出入りするわへ」といふが如きは、即ち其例である。助六の痰火は矢張この種類のもので、その誇張的なるには、覺えず哄笑を誘はれる。その誇張的なる文句をそのまゝ書に現はして、京傳は「新版替道 中双六」(小生所藏の書、表紙破れて題目不明なれど、多分道中双六ならむ或は道中助六か。)といふ黄表紙を作つて居る。これは助六と意味が打連立つて東海道を京へ上ると云ふ趣向であるが、品川の處を見ると、助六の所謂刷毛先の間へ禿が尺

八を突込んで之を遠眼鏡のつもりにして安房上總を覗いて居る。神奈川では富士の人穴が人の鼻の穴の様に描いてあつて、その内へ助六が屋形船を蹴込んで居る。吉田では煙管が雨の様に降つて居ると、助六が傘をさして歩いて居る、その側に意休が雨装束をして馬に乗つて居る。是等は助六の言葉を其儘繪に現して、直に滑稽畫になつて居るのである。江戸ッ兒の痰火の罪がなくて寧ろ心持の好い滑稽であるといふ事は、京傳といふ審美學者が黄表紙といふ審美學で説明して居るのである。最後にこの狂言の脚本としての組立に就て感じた處を一言にして云へば、長いものではあるが、冗長なものではない、随つて抜いて好い箇處は一つもないと思ふ。今度の芝居では満江のはじめの出、白酒の云ひ立から、河東の「春霞立てるや」と唄ひ出す前までを悉く畧して居るが、之は是非無ければ可けない。白酒賣が助六へ金を返す件も抜いて居る様だが、之も「いえ、人に物を借りて居ては、いふ事がいはれませぬ」といふ上から云つ

でもなくてはならぬ處だ。意味が一度引込んでから揚巻と助六と痴話狂ふ處は自分が小供の時に見た團十郎晩年の助六にもやらなかつた様であるが、あすこは助六と揚巻の中を見せる點からいつても、満江が歸つて意味が二度目に出る間の繋ぎとしても必要な部分で、こゝを抜くのは、昔の作者の考へた段取を無視した話だ。

『河 庄』(明治廿九年十月。歌舞伎座。)

今度東京で雁治郎の演じた「紙治」は門左衛門の『天の網島』ではなく、半二の『心中紙屋治兵衛』であるといふ事を聞いたから、始めてその『心中紙屋治兵衛』なるものを通讀して見た。これはいふ迄もなく『天の網島』を adapt (改作) した淨瑠璃で、善六は三を慕うてこれに嫌はれる、太兵衛は小春を追掛けてこれに逃げられる、その太兵衛は善六の助けを借りて小春を得んとし

善六は又太兵衛の後援に依つて三を心の儘にしようとする、その書出しからして全然「お芝居」に出来上つて居るものであるが、『心中紙屋治兵衛』淨瀬の段参照『河庄』は流石に原作を大破壊する勇氣がなかつたと見え、略『天の網島』の通りに行つて居る。大詩人の作に手を入れた半二と、これに餘計な工夫を加へた俳優とが責を負はなければならぬ。



中村雁治郎の河庄

然も今度の芝居を見て門左が書いた治兵衛、門左が書いた小春を見て居る感じがしなかつたのは、少しても

第一吾人は門左の『天の網島』の上の巻を読んで、その筆が治兵衛に主にし
て、小春に疎であるなどといふ事は少しも感じないのに、今度の芝居を見て
居ると、治兵衛計り演る事があつて、小春の方は演る事がなく、云ふ事がなく、
寧ろ手持不沙汰で居るやうに見えたのは如何いふ譯であらう。半二は治兵衛を
して門左より多くの科白をなさしめた。然るに小春の方は殆ど門左が書いた儘
にして置いた。即ち治兵衛の科白を成べくも芝居にするやうにと費しただけの
力を、小春に向つては注がなかつた。従つて治兵衛の丁場計り長くなつて、そ
の間小春は只俯伏して何もせずに居なければならぬやうになつたのだ。半二
が改作した淨瑠璃に於てすら既に爾であるのに。治兵衛を演る役者が小春を
演る役者よりも多く位置の高い爲に、自分計り儲けやうとして多くの科を加
へたから益々小春の科白が貧しくなつたのである。原作者が二人或は三人の性
格を描くに同じ力を以てしたものを、座附の作者や俳優が或一つの人物に儲け

させやうと思つてこれを直し、原作に於ける人物描寫の比例を打壊して先人
の苦心を蹂躪して了ふのは、昔も今に變らなかつたと見える。

阿呆の小僧が小春の處へ手紙を持つて來る條は、「新小説」に出て居た雁治郎
の話に依ると「半二が添へたものだ」と云つて居るが、僕の讀んだ半二の院
本にはそんな事は書いてない。これは多分「見物に分るやうに」といふ例の
「役者の親切」から加へたものに違ひないが、不必要だ、否あつては不可ま
と思ふ。どうせ『河庄』と云へば、一戯曲中の一齣を演るものであるから、
首尾全からざるは當然の事である。尾既に全からず、強ひて首をして全からし
むる必要はない。殊に手紙を貰つて返事をしてから治兵衛に愛想盡しをする迄
の時間が餘りに短くなつて、爲めに小春の深い人情も一時の出來心の様に思は
れて了ふは、全くこの小刀細工の罪である。

太兵衛の金の一件は、雁治郎の話にもある通り半二がつまりまらない芝居氣から

書添へたもので、その「浮瀬の段」といふのを讀んで見ると、治兵衛が揚代が拂へないで困つて居ると、そこへ太兵衛が来て二十兩の金を貸してやらうといふ。治兵衛はそれを枷に小春を我物にしようといふのであらうと罵倒して借りようとしなさい。そこへその夜の小春の客なる僧が出て来て二十兩の金を貸してやる。(これは河庄の侍客と同趣向で聊か重複の感がある)治兵衛その親切に感じてこれを借り、名前を聞いても云はぬので、名宛のない證文を渡す。處がこれは太兵衛の策略で、僧といふのは人を雇つてその真似をさせたのだ。さてその名宛のない證文へ自分の名を書き入れて、河庄でこれを楯に治兵衛を窘めるといふ筋になつて居る。この金の件などは、太兵衛善六を餘程主な人物にして居る。半二の淨瑠璃全體から云へば兎に角、吾人をして門左のそれを出さしむべき『河庄』の一場だけで見れば、全然不用である。第一坊主にしろ誰にしろ名譽心の強い(その爲に死んだのだ)治兵衛が知らぬ人から金を借りさう

な事がない。その他の點から云つても半二の書いた治兵衛は、門左の書いた治兵衛より餘程小さい、意地張の度が弱い、下等だ。その他細い點を比較して見ても、門左は人間を寫さう、感情を描かうとして居るのに反して、半二は芝居にしやう、見物に解らせようといふ點に計り注意して居る事が解る。「表に厭な李韜天が居るわいの」を「表に厭な毛虫客が来るわいな」と直したなども、なまいた坊主のてんがう念佛を抜いたのと同じく、門左作物の樂屋落を避ける積りであるかも知れぬが、平凡な直し方だ。「連衆(門左の作には善六或は傳六といふ名前はなし、只連衆と呼んで居る)内々話した心中よし、いき方よし、床よしの小春殿」といふ有名な句を、「これ善六、汝も知つて居るこの小春」と雑作もなげにやつけた處なども不賛成だ。小春の文句で「私一人を頼みの母様」の次の一句「南邊に賃仕事して裏屋住」を抜いて了つたなどは、殆んど氣が知れぬ。「何の因果に死ぬる契約した事ぞ、思へ

ば口惜しうござんすと」の次へ「口と心は裏表、絞る袂は雨露の」と入れたなぞも、見物への「御親切」であるが、餘計な事だ。「あいとは云へど見知りある脇差の突かれぬ胸にはつと貫き、酔狂の餘り色里にはある習ひ」と原作にある處を、「……はつと貫き、治兵衛様、何がなんと、サア慈悲といふ事がなければ人は難儀をするげな、あんまり酒を過ぎて色里にはある習ひ」と直したのも例の芝居氣からであらうが、臭い事だ。「この孫右衛門はたつた今一見にて女の心の底を見る」の一句と「二年餘りの馴染の女、心底見付けぬ狼狽もの」の一句とは對句であるのに、その前者を取つて後者を捨てたのも解らない。治兵衛が後悔する處で、門左は「大地を叩いて治兵衛、過失つたく」といつて居る。半二は「治兵衛涙を押し拭ひ、ア、過失つたく」といつて居る。どつちが強いか問ふには及ぶまい。お三から小春へ来た手紙を孫右衛門が見附けて訝むと、治兵衛が「コレ兄ぢや人、どこの客から来た状ぢや、一寸見せて」といふ

處は門左にはない處だが、未練を現す科白としては入れても好いだらう。以上は「天の網島」全體の評でもなく、「心中紙屋治兵衛」全體の評でもない。只「河庄」の一場に就て、門左の原作と半二の改作とを比較して感じた處を述べたのみである。門左の作の不朽なる事は論ずる迄もあるまい。半二の改作も原作を離れて一つの「芝居」としては後世へ残るであらう。

『引窓』(同 前)

『引窓』は『双蝶曲輪日記』の八ツ目で、後妻に入つた母の先の息子に對する情と、養子にやつた實子に對する情とを織なしたもので、流石は竹田出雲、技巧は實に旨いものだ。今の三人の義理人情の關係が、この一場で段々に變つて行く處を表に書いて見ると、

第一段

母。殺人犯の質子長五郎を逃がさうとする。

典兵衛。殺人犯人を捕へて功を立て繼母に孝ならんとする。

第二段

典。殺人犯人の繼母の質子なる事を知りこれを逃がさんとする。
母。典兵衛の心を聞いて大に喜び共に長五郎を逃がさうとする。

第三段

母。前に同じ。
長五郎。尋常に繩に掛らうと云ふ。

第四段

母。前に同じ。
長。餘り母のいぢらしさに（剃刀にて自害せんとする條）逃げようとする。

第五段

長。私を逃がした典兵衛の父御へ立ち升まいがのと云ふ。
母。成程と亡き夫へ義理立てて長五郎を縛す。

第六段

典。母の亡父に對する義理立てを充分に見た後己れは長五郎の繩切つて養母への義理を立てる。
母。典兵衛に對する義理と長五郎に對する情とが始めて融和したので長五郎を逃す。

この間（第一段より第五段までの）母の心の轉移は「イヤのう一旦かばうたは恩愛、今又細掛け渡すのはなさぬ中の義理、晝はかばひ、夜は細掛け、晝夜と分る繼子本の子、慈悲も立て、義理も立て、草葉の蔭の親々への云ひ譯」と

いふ院本の本文で實によく盡してあると思ふ。この義理と情との闘ひを巧に書き現はしたのが作者の山でもあり、吾人看客の驚嘆する處でもあらうけれど、餘りに技巧に過ぎた結果、こは情を描寫するものに非ずして、情を弄ぶのもなりと云ふ感じを抱かせるのは生會と、長五郎の身の安全とを取合した處なども例の技巧であるが、銘にも打つてある通り、「引窓」が尤も技巧的に用ゐてある。始め芝居を見た時には、



中村雁治郎の窓

甚だ心外な事である。
月見を背景にして例の晝夜の趣向をした處、「明れば即ち放生會」と、翌日の放

手洗鉢の上に引窓があるので、臺所でなければ無いものだと思つて居た僕は一寸可笑い感じがしたが、「新小説」所載の雁治郎の話に依つて、「山崎といふ處は藪ばかりで薄暗い土地だして、家々ではその屋根に明り取りの引窓を明けて置いて、雨の降る日は窓を開いて天水を取るの、今にその通り遣つて居ります」といふ事を知つた。

引窓は五段に使つてある。

(第一)「二階より覗く長五郎」の顔が十四日の月明りに、引窓を通して天水に寫る。

(第二)「おはやが引窓びつしやり、内は眞夜となりける」面白く、日が暮れたればこの奥兵衛が役、忍び居るお尋ね者、イザ召捕んとする條。
(第三)「おはや」それまた日が高いと引窓ぐわらり、明けて云はれぬ女房の心遣ひぞせつなけれ」の條。

(第四)「母親は幸ひありあふ窓(即ち引窓)の繩、押取つて小手縛り、突放せば、引窓に窓は塞がれ、心は闇」の條。

(第五)十次兵衛「細先知らぬ窓の引繩、三尺残して切るが古例、目分量にこれからと、スラリと抜いて縛り繩、ズツカリ切ればぐわらぐわら、差込む月に南無三寶夜が明けた、身共が役は夜の内計り、明くれば即ち放生會」の條。

以上の如く月の光と引窓の開閉とを巧みに用ゐて居る。これは「祖國」の作者井クトリアン・サルツウが、「加留田」の手の負傷……「丈治」の磨いだ劍——やがて白い布の付いた「加留田」の劍——リアル迄の旅手形などといふ小道具を巧みに用ゐて芝居を「面白く」見せるのと恰然同じ遣り口である。従つて僕がサルツウの翻案劇を見た時に、「仕組は自然である、併し乍ら自然から得て來た仕組ではなす」「The plot is natural, but is not from Nature」と感じた。

その感じを「引窓」を見た時にも繰返した。

演 劇 新 潮 終

明治四十一年十二月六日印刷
明治四十一年十二月十日發行

定價金五拾五錢

演 劇 新 潮

著 者 小 山 内 薫
所 有 權 大 橋 新 太 郎

著 者 小 山 内 薫

發 行 者 大 橋 新 太 郎

印 刷 者 石 川 金 太 郎

發 兌 元

東京市日本橋區
本町三丁目

博 文 館

刷 印 金 英 秀 社 總 發 行
地 番 七 六 廿 四 區 紺 西 區 橋 京 市 京 東

全一册洋装四六判
待製脊皮金文字入
紙數九百七十六頁

訂校局輯編館文博

集全優俳

定價金六拾錢
郵税金六拾錢

●●●次 目 書 本●●●

- ▲爰 仰 天 網 島 三市
- ▲枝 珊 瑚 京 打 笄 尾幸上
- ▲三 日 月 ぶ せ ん 幸四郡
- ▲聞 勇 八 幡 祭 幸四郡
- ▲其 偉 夕 暮 譚 幸四郡
- ▲ぬ し や 誰 問 白 藤 幸四郡
- ▲春 の 曙 幸四郡
- ▲風 俗 三 國 志 幸四郡
- ▲伊 達 姿 辰 巳 八 景 幸四郡
- ▲和 歌 三 神 山 來 幸四郡
- ▲手 前 味 噌 幸四郡
- ▲色 三 味 線 幸四郡
- ▲流 行 歌 幸四郡
- ▲いろは假名娘席書 幸四郡
- ▲向 人 廓 山 彦 幸四郡
- ▲蝶 雙 春 花 壇 幸四郡
- ▲傾 城 が 嶽 幸四郡
- ▲杜 若 紫 再 咲 幸四郡
- ▲娘 客 意 氣 地 幸四郡
- ▲尾 上 松 幸四郡
- ▲狂 言 幸四郡
- ▲中 村 秀 鶴 幸四郡

館 文 博 町 本 京 東 元 兌 發

福地櫻痴居士脚本

芳 哉 義 士 譽

此脚本は櫻痴居士の新作にして團菊兩齋が歌舞伎座に於て演ぜしもの其筋書は赤穂義士復讐事畢りて諸侯四家へ預らる大石内藏之助等十七人は細川邸に在りて慎んで幕府の裁決を待つ幕府にては其處刑に關して議論兩派に分れ遂に切腹に決す此際大石の心專細川侯の義侠又は夫妻親子の訣別最後の決心等を脚本として之を五幕に作る櫻痴先生斯文に堪能なる新に喋々を契せず江湖の諸君乞ふ陸續御購讀あらんことを

—(行發館文博)—

福地櫻痴居士著(脚本)

肥後武士 江戸藝者 花 盛 劇 楓 葉

全一册洋装菊判 紙數百十八頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

福地櫻痴居士著(脚本)

山 中 平 九 郎

全一册洋装菊判 紙數百五十二頁 正價金參拾錢 郵稅金六錢

高安月郊君著(脚本)

江 戶 城 明 渡

全一册洋装菊判 紙數八十六頁 正價金參拾錢 郵稅金六錢

博文館 淨瑠璃書類

芳賀、三上兩文學博士序
山本九馬亭君著

淨瑠璃通解

全六册(大判約千三百頁)
正價一册卅五錢
郵郵一册卅六錢

水谷不倒君校訂

義太夫百番

正價金壹
小包料八
▲全一册洋裝袖珍總クローヌ金文字入
紙數千三百餘頁

水谷不倒君校訂

江戸作者淨瑠璃集

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一册洋裝中判脊皮特製||紙數千六十頁
○河井正宗由來芭蕉翁俳諧瀟灑志賀殿討○矢口後
日荒御靈新田神德○伊達就阿國戲場○宇賀道者源
氏鑑○吉野醉人目干本○狸和尚動化帖化地蔵略縁
肥化鏡五滿鐘○糸根本町育○源氏大草紙○靈驗宮
月川○足田詰基軍記○裙重血紅跋○自雷也物語○
鏡山菫錦繪

水谷不倒君校訂

竹田出雲淨瑠璃集

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一册洋裝中判脊皮特製||紙數千四十六頁
○小町炭燒深草土器師七小町○白髮實盛黑髮實盛
加賀國篠原合戰○江戸文七髮結大阪文七紺屋男作
五雁金○三莊太夫五人嬪○甲賀三郎富物語○小栗
判官車街道○蝶々雙々曲輪日記○菖蒲前操絃

饗庭篁村君校訂

近松時代淨瑠璃

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一册洋裝中判脊皮特製||紙數千八百頁
○凱陣八鳥○唐船斬今國性爺○大職冠○賀古教信
七墓廻○曾我五人兄弟○浦島年代記○大原問答青
葉笛○曾我五枚羽子板○國性爺合戰○文武五人男
○李常盤○大磯虎稚物語○平家女護島○松風村雨
東帶鑑○持統天皇歌軍法○國性爺後日合戰○鎌田
兵衛名所丞○源氏冷泉節○曾我虎が石○當流小栗
判官○櫻狩劍本地○釋迦如來誕生會

水谷不倒君校訂

並木宗輔淨瑠璃集

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一册洋裝中判脊皮特製||紙數千四十頁
○道成寺現在蛇鱗○七條河原釜淵雙級巴○日蓮記
兒硯○北條時頼記○安倍宗任松浦登○後三年奥州
軍記○軍法富士見西行○刈萱脚門鏡紫雲○一休蟻
川本朝聖特山○捕書嘶○那須與市西海現○丹生山
田青海飯○攝津國長柄人柱○一谷嫩軍記

水谷不倒君校訂

文耕堂淨瑠璃集

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一册洋裝中判脊皮特製||紙數千十頁
○河內國姥火○佛御前扇車○三浦大輔紅梅約○信
州姥捨山○鬼一法眼三略卷○須磨源平藤園○車還
合戰櫻○應神天神八白旗○敵討靈襦袢○行平磯馴
松○今川本領猫鬘館○將門冠合戰○伊豆院宣源氏
鏡○敵討御米太鼓

水谷不倒君校訂

續近松淨瑠璃集

正價金六拾錢
小包料拾貳錢
▲全一册洋裝中判脊皮特製||紙數千九十頁

目次

○百日曾我○源子烏帽子折○長者女腹切○輝丸○
用明天皇職人語○心中二枚繪草紙○曾我扇八景○
おさん夜兵衛戀八卦柱曆○おとをい心中卯月の酒
色○二那兵衛おさき今宮心中○百合若大臣野守鑑
○吉野都女捕○天神記○嵯峨歌加留多○曾我會稽
山○本朝三國志○傾城島原蛙合戰○井筒樂平河内
通○後太平記四十八卷津國女夫池○女殺油地獄○
信州川中島合戰○心中宵庚申

水谷不倒君校訂

紀海音淨瑠璃集

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一册洋裝中判脊皮特製||紙數千十頁
○末廣十二段○殺生石○八百屋お七○頼光新跡目
論○傾城國性爺○花山院都罪○鎌倉三代記○神后
皇功三朝實○吳越軍談○東山殿室町合戰○傾城無
間鐘○小野小町都年玉○新百人一首○忠臣青砥双
○三井寺開帳○本朝五翠傳○曾我奏富士○甲陽軍
艦今櫻粧○義經新高館○鎮西八郎唐五船○心中二
ッ腹帶○玄宗皇帝蓬萊鶴○難波橋心中

水谷不倒君校訂

●近松半一淨瑠璃集

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一冊洋裝中判脊皮特製||紙數千九百頁

目
○役行者大峰櫻○山代國番生塚○關帝待新田系圖
○三日太平記○萩大名傾城敵討○道中龜山嶺○時
代織室町錦織○奥州安達原○お花半七京羽二重娘
氣質○小夜中山鐘由來○傾城阿波鳴門○東海道七
里濱○新版歌祭文○管歌唱歌系の時

博文館編輯局校訂

●淨瑠璃名作集

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一冊洋裝中判脊皮特製||紙數千八百頁

目
○菅原傳授手習鑑○伊賀越道中雙六○妹背山女庭
訓○太平記忠臣講釋○關取千兩鐵○御所櫻堀川夜
時○蘆屋道滿大内鑑○鶴經手本櫻○本朝廿四孝○
壇浦兜軍記○ひらかな盛衰記○小野道風青柳硯

幸堂得知君校訂

●忠臣藏淨瑠璃集

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一冊洋裝中判脊皮特製||紙數千八百頁

目
○葦盤太平記○假名手本忠臣藏○いろは歌鏡臣鑑
○勲方武士鑑○忠臣いろは實記○忠臣墳墓約大石
○忠臣後日晰○忠臣金短冊○離波丸金溪○太平記
忠臣講釋○いろは藏三組盃廓景消雪の茶會○忠臣
一力祇園時

博文館編輯局校訂

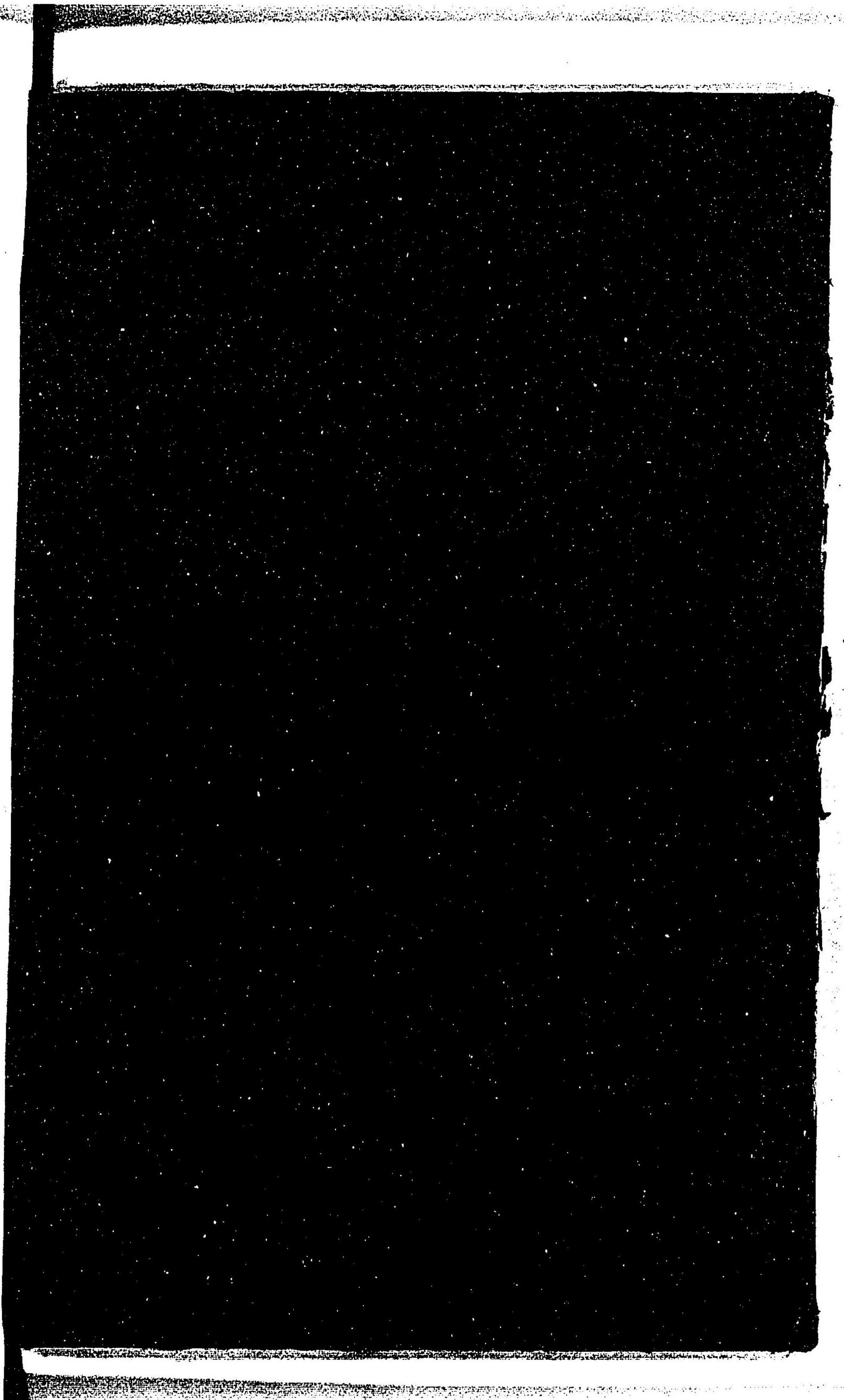
●近松世話淨瑠璃

正價金六拾錢
小包料拾貳錢

▲全一冊洋裝中判脊皮特製||紙數千四百四頁

目
○曾根崎心中○薩摩歌○鎗の權三重帷子○博多小
女郎派枕○紙屋治兵衛紀伊國屋小春天の綱島○お
ふさ徳兵衛重井筒○丹波興作○堀川夜討○夕霧阿
波鳴門○傾城酒香童子○日本武尊吾妻鑑○源氏十
二段長生鳥臺○吉野忠信○姥捨山○傾城反魂香○
山崎興次兵衛壽の門松○生玉心中○心中萬年草○
おなつ清十郎五十年忌歌念佛○心中双は水の朔日
○淀廻出世流徳○おかめ興兵衛緋縮緬卯月の紅葉
記○室町千疊敷○最明寺百人上臈○門出八島○雙
生隅田川

17
40



17
400

074771-000-2

17-400

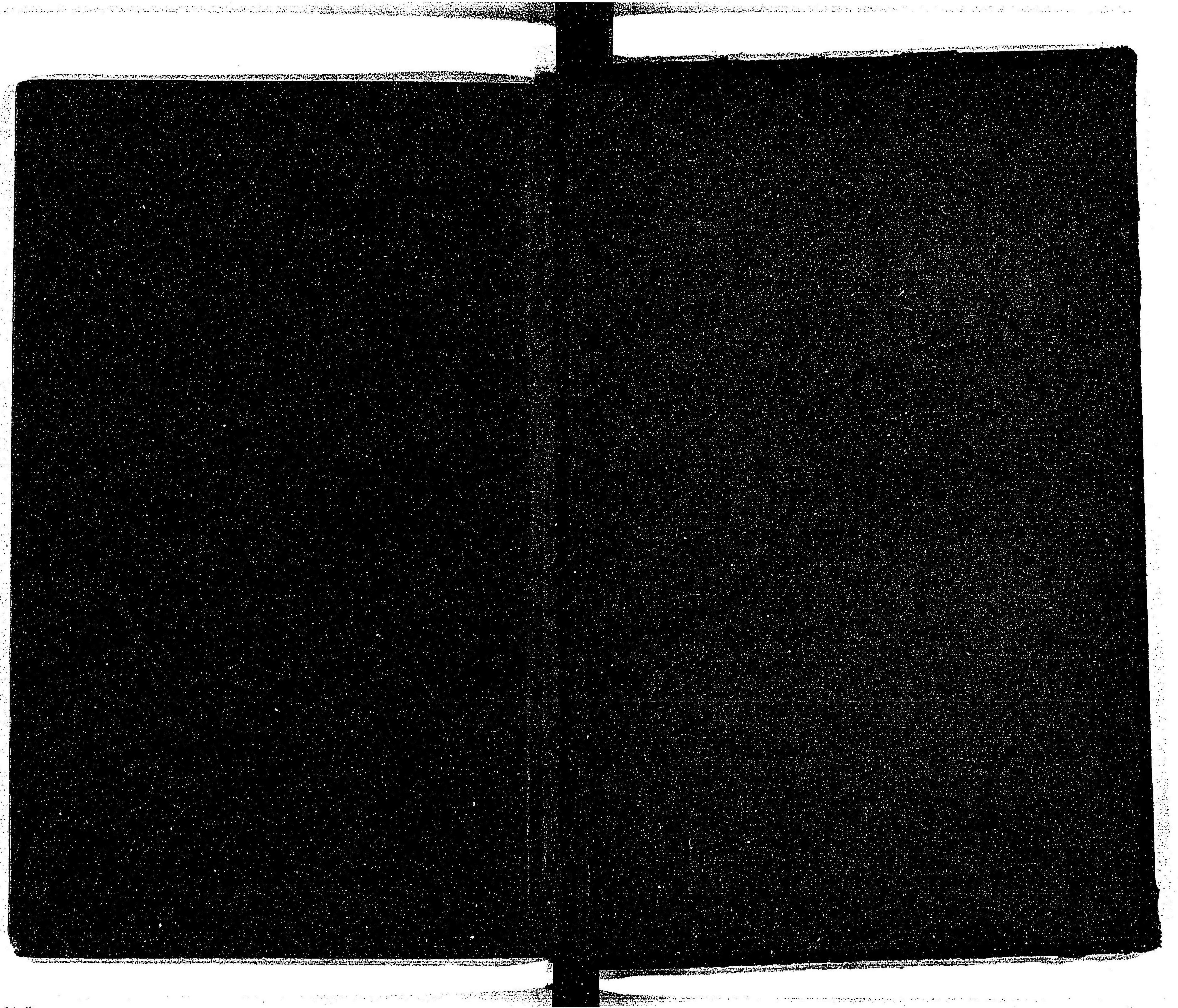
演劇新潮

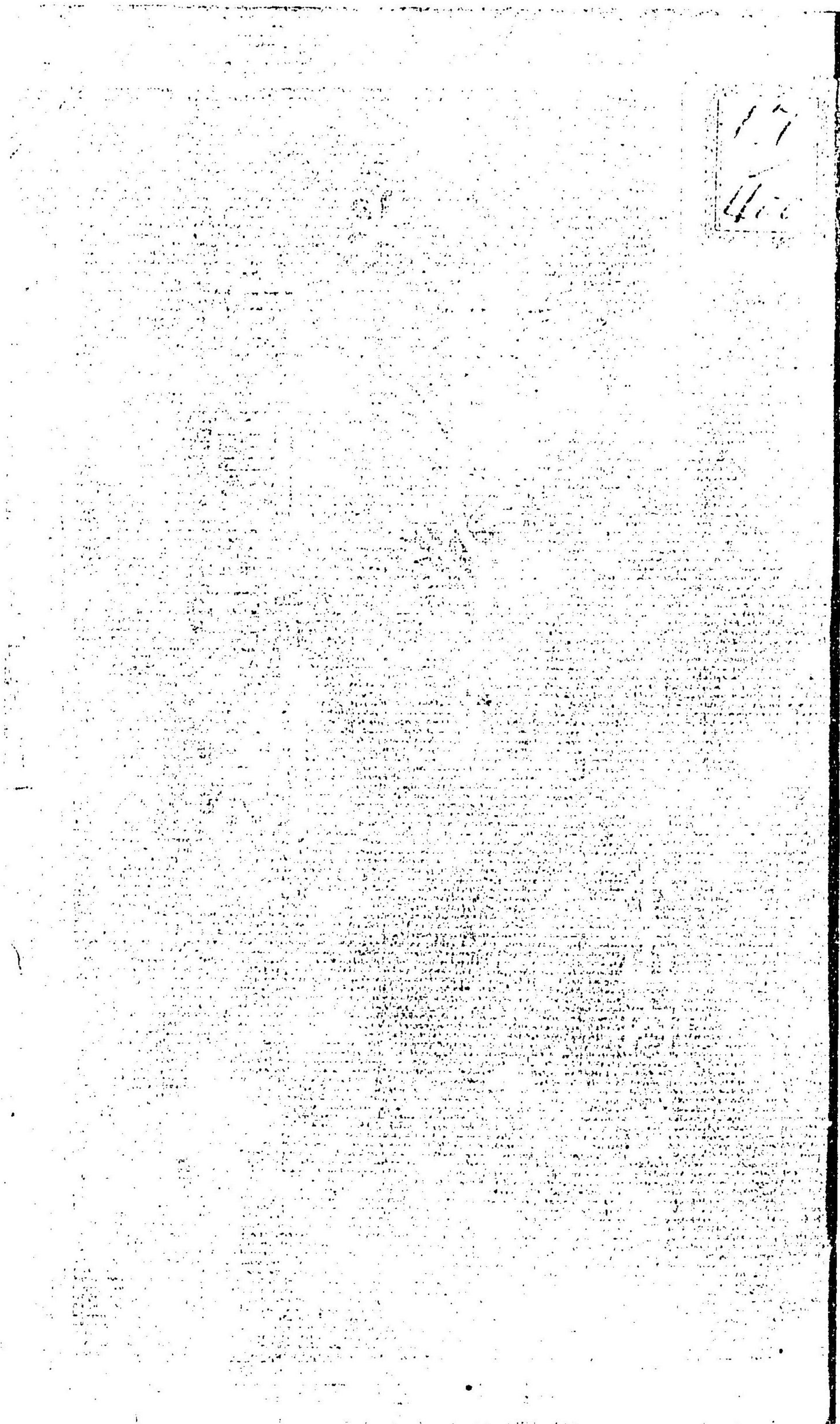
小山内 薫/著

M41

CEK-0069







17
400